

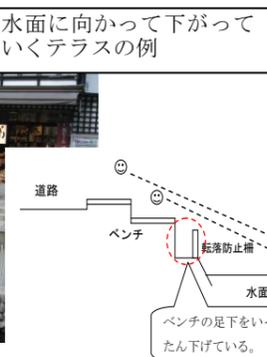
大場川（水辺再生 100 プラン）

① 基本設計段階のアドバイスへの対応

- (1) 小規模な休憩施設を数カ所整備できるとよい。
⇒整備区間（L=100m）内に、ベンチ2箇所とテラス1箇所を整備した。
- (2) 視方向の立ち上がりを抑え、視対象を見やすくすべきである。
⇒テラス部以外については、護岸の勾配が1:1.5、高さが2m程度であるため転落防止柵は設置していない。
- (3) 対岸との一体化が図れるとよい。
⇒今回は片岸の整備であるため、対岸を整備する際の参考とする。

② 完成した事業の評価

- (1) 地域住民がイベント等に利用しやすい空間として整備したことは評価できる。
- (2) 通路（堤防天端）舗装のベンガラ色は、地域の方々との検討ワーキングによって決めたものであるが、周囲の風景（自然の緑、水、空など）に対して赤味が強く違和感のある色となっている。交通安全の面などでの問題がないのであれば、埼玉県景観形成指針の色彩制限も踏まえ「風景に溶け込むような」落ち着いた色とすべきであった。
- (3) 護岸が直線的で景観的な変化に乏しいため、雑ばくな印象になっている。単調に見えないような工夫が欲しかった。
- (4) テラスと通路（堤防天端）に段差が生じてしまったのは残念である。
また組立歩道によるテラスは平坦であり、転落防止柵の立ち上がりが景観を阻害している。コストや工期の制約もあるが、可能であれば水面に向かって下がっていくようなテラスが望ましい。



③ 今後に向けたアドバイス

- (1) テラスと通路の段差をスロープで摺りつけて解消するのが望ましい。



※安全に利用しやすく整備されたものは、使う人、見る人を安心させ「心地よい」景観づくりに寄与する。

スロープで摺りつけ

- (2) ベンチの領域性を確保するのが望ましい。



※ベンチの周りの空間が通路から分節されておらず、領域性が確保されていない。このようなベンチでは、座った人は安心感を感じられず、落ち着かない。
⇒ベンチの領域性を確保することでベンチが利用しやすくなり、「心地よい」景観づくりに寄与する。

※ベンチの背面に植栽し、ベンチ両側にプランターなどを置くことで領域性を確保することができる。

※ベンチは民地との境界付近に設置されているため、地元の協力を得て植栽を行うことが望ましい。



良いベンチの例